

村瀬公胤先生招聘校内授業研究会

(1) 単元名： 分数と小数・整数

(2) 本時の目標： 分数倍の意味について理解する

宮古市立北小学校、3年前から学びの共同体の理念による学校改革と授業改革に取り組んできた。今年度は職員の異動が多く3年前からの教師が少なくなってしまった状況である。そこで校内研においても今一度、東京麻布教育研究所所長村瀬公胤先生(学びの共同体SV)を招聘しての学び直しである。



本日は、2校時から全教室を参観させてもらい、5校時には4月に赴任された教師による研究授業が開かれた。新任ではあるがベテランの域の教師である。これまでの自分から、これからの自分づくり、これからの授業づくりへの挑戦である。

☆文中の児童の名前は全て仮名である。

【教師も支え合う】

「S先生、これからはテンションを下げて座って授業を進めてください。」「えっ?」



4月や一学期の校内研修でこんな対話があったのではないだろうか。S先生がこれまで培ってきた理論や方法がある。しかも各学校を転勤するうちにその学校の校長先生のビジョンによって方法論は変えられてきた。ここでもか! そんな不安や疑念、迷いがあったのではないだろうか。「学びの共同体」では、教師から子ども達に発せられた言葉は教師自身も実践することが大切であることが常々語られる。今年度赴任したばかりのS先生の迷いや不安を前任の先生方と共有し、職員室においても「教師が互いに支え合う風土」を創り出し、教師の同僚性と専門性を高めていこうとする意識が大切である。『互いに支え合う』とは学校改革のすべての当事者達(児童、先生方、保護者、地域の方々)の挑戦である。

《授業者より抜粋》…大人も謙虚さと、素直さが大切である。

・・・担任の力量不足と本研究に関するのが初めてということもあり…グループでの学び合いが成立しているとは言い難い現状にあります。…まだまだ、伝え合う活動が十分ではありませんが、自分なりの言葉でお互いが考えていることを「伝え合える学習」を積み重ねていけるといいなあと考えています。



【共有課題】：赤、青のリボンの長さが、白いリボンの何倍かを考えよう。



丁寧にやさしく。子ども達が困らないように優しい母の手の中で育つ子ども達である。右写真、子どものつまる言葉を実に丁寧に扱う授業者の姿。



【ジャンプ課題】



授業者はここでも丁寧にジャンプ課題を下ろした。子どもの口元から小さな声で「やったあ」と聞こえた。子ども達は、難問が大好きである。誰も簡単には解決できない問題が「きき合う必然」を創り、子ども達が自然とつながり合い支え合うのである。右の写真①②、気にかけていた男の子に寄り添う女の子である。



写真③、最初はお互いペアでやっていたがやはり難しいと悟った、結局1枚のワークシートを4人で考えることになった。素晴らしい!

S先生、お疲れさんでした。優しいですね。授業観察中、私の頬も緩みすぎてS先生に失礼にならないように頑張って拝見させていただきました。子ども達は先生に対し安心しきっています。頼られる素敵なお母さんです。次回挑戦の指標として「安心して転ばせる。」「優しく困らせる。」難しいけど挑戦してみてください。ほんとに癒される素敵な授業でした。感謝! 国頭学びの会ゆい

4年算数 授業者：I・A先生（初任者） 単元：概数

めあて：○ およその数の表し方あることに気づき、その表し方について考える

○ 概数の意味や用語がわかる。



写真①

緊張感みなぎる初任者の表情である。しかし、この子達の担任である以上授業の成立は責任を負わなくてはならない。自分の不安をおさえて、笑顔で子ども達と向き合う。授業者の表情が硬くなると、その緊張感は必ず子ども達に伝わり、子ども達もこわばってしまう。人間の脳は、リラックスした時が一番活性化する。子どもの緊張感やリラックスを調整できるのは、授業者の表情と「言葉」である。一人残らずすべての子ども達が「安心」できる教室を準備するのは我々教師の責務である。教師の言葉、教室掲示（写真①②）自分のことが大切にされていることをなんとなく実感できる、そんな教室（ここに居ることが安心・楽しい）が子ども達の一番の居場所となる。



写真②



写真③

写真④、算数的協同活動が対話と笑顔をつくる。聞かされて、書かされて、覚えさせられて、テストで試される。そんな授業は誰だって遠慮したい。せっかく居る教室の仲間と楽しく難題と向かい合いたい。⇒（協同と対話へ）

☆ 初任者のあなたへ
「あなたはなぜ教師を目指したのですか？」
わたし（自分）が教師になろうと思った理由を一生忘れないでほしい。



写真④



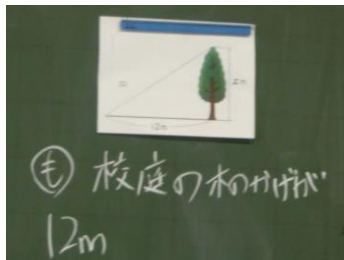
写真⑤

教育は 10 年後の子ども達の未来を見据えて育てることである。学校の目的（役割・意義・誰のための学校）、教師の使命（聖職者として）、さまざまな教育の理念や理論をグローバルに吸収し、10 年後のあなたの心の中でささやかれる教育者としての哲学の確立と実践に期待します。

6年算数 授業者：K・H先生 単元：比とその応用

めあて：○ 比が等しいことを調べ、等しい比の性質を活用することができる

[共有課題（テキストより）]

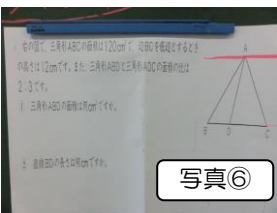


臨任の頃から数えると 3 年目の授業者、だいぶ学び合う授業のデザインがシンプルで分かりやすくなった。教科書の基本問題で足場をつくり、ジャンプ問題で脳に汗をかかせている。写真左の共有課題が下ろされると、遠慮なくきき合う 6 年生、さすがである。参観されるのも慣れているのだろう、私や村瀬先生のこともまったく気にしないで、夢中になって問題と向き合っている。



この子達が 4 年生のとき「学び合う授業、支え合う授業」創りが本格的に始動した。この子達にとって「分からなければ友達に訊く」「訊かれたら一緒に考えてあげる」「みんなでやりとげる」はすでに当たりまえ化している。あとは教師が教材研究を深め、各教科の真正の学びをデザインしやりとげることに生きがいを見出すジャンプ課題やテーマを準備することである。まじめで、一生懸命で、反省家でやさしいだけでは、子どもは育たない。思い切った授業デザイン、大胆に（アバウト）、曖昧を試してみる（ファジー）、どうなるかわからないから研究の価値があるのである。

写真⑥、本時のジャンプ課題である。授業者はグループに 1 枚のワークシートを配布したができれば各々に 1 枚ずつ配布し、各々の考え方を学びのネタとしたいところである。写真⑦、解決したい仲間の手が交流する。



写真⑥



写真⑦

右の写真、共有課題ではつながらなかった二人の男の子が身を乗り出して解決に向かっていく。簡単でない問題がつながりをつくる「ジャンプ課題の有効性」である。



継続は簡単ではない。では、なぜ継続が必要か？それは、継続が途絶えたとき誰が一番困るかを考えていただきたい。「去年の先生とやり方が違う」一番戸惑うのは子ども達である。学校は子ども達のために存在するのである。子ども達がのびのびと安心して学び合える教室を準備することが教師の使命でもある。校内のベクトルが散漫になると教師互いの言葉にも行き違いが発生し、子どもの中で不安が生じ、「安心」を疑うようになる。そして必ずその事が子どもの表情やしぐさ、行為に表れてくるのである。・・・頑張り北小！ 素敵な授業ありがとうございました。 国頭学びの会ゆい